

史跡追加指定答申文化財概要（三重県）

記念物（史跡） 追加指定 熊野参詣道（伊勢路）

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 名称（員数） | 熊野参詣道 紀伊路 中辺路 小辺路 大辺路 <u>伊勢路</u>
熊野川 七里御浜 花の窟 |
| | 追加指定後面積 | 1,414,400.75㎡（延長33.4km） |
| | 既指定面積 | 1,413,152.35㎡（延長32.9km） |
| | 追加指定 | |
| | <small>いしぶつあん</small>
石仏庵 | 263.00㎡ |
| | <small>めきとうげみち</small>
女鬼峠道 | 661.14㎡（延長487.983m） |
| | <small>やきやまこうじんだうあと</small> 及び <small>ちややあと</small>
八鬼山荒神堂跡及び茶屋跡 | 324.26㎡ |
| | 追加指定面積計 | 1,248.40㎡（延長487.983m） |
| 2 | 種別（区分） | 記念物（史跡） |
| 3 | 所有者 | 石仏庵：民間（団体）、女鬼峠道：民間（個人）・多気町、
八鬼山荒神堂跡及び茶屋跡：民間（個人・団体） |
| 4 | 所在地 | 石仏庵：玉城町原3390番、外1筆
女鬼峠道：多気町野中264番等
八鬼山荒神堂跡及び茶屋跡：尾鷲市南浦地内 |
| 5 | 指定年月日 | 平成12年11月2日（指定）、平成14年12月19日（分離・追加指定・名称変更）、平成24年1月24日（追加指定）、平成27年10月7日（追加指定・名称変更）、平成28年3月1日（追加指定）、平成30年2月13日（追加指定）、令和4年11月10日（追加指定） |

熊野参詣道は、紀伊半島の南端にある熊野三山（本宮、新宮、那智）へと向かう巡礼の道です。伊勢から熊野へ至る伊勢路、京・大坂方面から熊野へ至る紀伊路・大辺路・中辺路、高野山と熊野三山を結ぶ小辺路、吉野と熊野三山を結ぶ大峯奥駆道があります。古代末期から近世・近代に至るまで、貴賤を問わず多くの人々が熊野三山への信仰と憧憬によって歩んだ道であり、我が国の歴史・社会・文化を考える上で欠くことのできない交通遺跡であるため、平成12年に史跡指定、平成14年から令和4年にかけて6度追加指定されています。

伊勢路は、平安時代の日記や紀行文から、10世紀頃には利用されていたと

考えられますが、古代末から中世に遡る道は確認されておらず、これまでも史跡に指定された道は、すべて近世以降に用いられた道です。江戸時代中期以降は、伊勢神宮への参詣が盛んとなり、伊勢神宮参詣後、西国三十三所巡礼に向かう者も多くなります。伊勢路は、こうした西国巡礼者が通った道として評価されています。巡礼者は、伊勢山田（伊勢市）を発出し、田丸（玉城町）で伊勢本街道から分岐し、道中、観音信仰や修験、地域霊場などの礼拝施設（名所）に巡礼者が立ち寄りながら熊野へと至ります。当時の絵図や道中案内記などに記された道や名所が現在も残されています。

● 石仏庵（玉城町）

江戸時代後期に田丸を出た巡礼者が、はじめに立ち寄る重要な礼拝施設です。嘉永 6（1853）年の『西国三十三所名所図会』には、原大辻観音庵とされていますが、近年では曹洞宗寺院として円通山石仏庵と呼ばれていました（昭和 23（1948）年廃寺）。観音堂内部には、西国三十三所霊場の本尊を模した観世音菩薩^{かんぜおんぼさつ}33 体の石造観音像が納められ、観音堂から参詣道を挟んだ北側には、文化 2（1805）年銘と「熊野路を道びきたまへ観世音きよき不浄の人をえらまず」の詠歌が刻まれた「巡礼道引観世音」^{じゅんれいみちびきかんぜおん}標柱が位置します。現地の観音堂と標柱の位置関係や標柱に刻まれた内容は『西国三十三所名所図会』の内容と一致しています。また、観音堂前の石階段には、文化 5（1808）年銘があることから、標柱と合わせて 19 世紀初頭に西国巡礼者が立ち寄る礼拝施設として整備され、廃寺後も地域住民の信仰が厚く、良好に維持管理がなされている貴重な遺跡です。

● 女鬼峠道（多気町）

多気郡野中村と相鹿瀬村^{おうがせ}を繋ぐ熊野参詣道伊勢路の最初の峠道で、天明 6（1786）年の『西国道中記』に記載される「瀬木峠」^{ねぎ}以降、「子ギ峠」「めつき峠」「メツキ峠」「メキ」と徐々に転じていき、明治時代には「女鬼」の漢字が当てられたと考えられます。峠には、西国三十三所巡礼の一番札所である那智山青岸渡寺の本尊と同じ如意輪観音坐像^{にょいりんかんのんざざう}（元文 3（1738）年銘）が安置され、この峠道が西国巡礼道として利用されていたことを示唆しています。峠道は、明治時代に峠の千枚岩の岩盤を開削した切通しと、荷車が通れるように整備された明治道があり、尾根周辺の江戸時代以前の道（江戸道）は失われています。しかし、明治道の合間には、尾根や谷筋を直線的に進む江戸道が所々で残されています。江戸道は、道の両脇よりも中央が大きく窪んだ幅約 1.8 メートルの土道で、江戸時代に多くの西国巡礼者が実際に歩いた貴重な遺跡です。

● 八鬼山荒神堂跡及び茶屋跡（尾鷲市）

西国一の難所とされ、伊勢路で最も区間距離の長い約 6,100 メートルになる八鬼山道の道中に位置します。荒神堂は、八鬼山日輪寺と称され、大

宝 2（702）年に修験者である阿闍梨返昌院仙玉法印^{あじやりへんしょういんせんぎよくほういん}の創建と伝えられています。『西国三十三所名所図会』では、本尊の三宝荒神（天正 4（1576）年銘）の他、脇檀に阿弥陀仏、観世音、薬師如来の熊野三山本地仏が納められていたとされています。西国三十三所巡礼の前札所として、道中の安全を祈願し、参拝されました。現在の荒神堂は、老朽化した明治 26（1893）年に再建された建物を解体し、令和元（2019）年に再々建された建物です。解体作業時には、明治時代の礎石も確認されています。

茶屋は、荒神堂の隣に山伏一家^{やまぶし}が居住し営んだとされ、文化 9（1812）年の道中記には、餅と酒を売る茶屋の記載があり、また『西国三十三所名所図会』にも餅を売る荒神茶屋^{きりつまひらりいたぶ}の記載と切妻平入板葺き屋根の建物が描かれています。茶屋の建物は失われていますが、道沿いには荒神堂と一連の石積み基壇が続き、茶屋跡の広場が残されています。また、茶屋跡から道を挟んで南東側には、湧水地と一連となる石積み基壇が残され、これは『西国三十三所名所図会』に描かれた木樋状の水路と貯水枡の痕跡と推測できます。水源として、茶屋に欠かせない一体の構造物の跡です。以上から、荒神堂跡及び茶屋跡は、ともに西国一の難所を歩く江戸時代の巡礼者を支えた貴重な遺跡です。



石仏庵（玉城町）



女鬼峠道（多気町）



八鬼山荒神堂跡及び茶屋跡（尾鷲市）